

02-001

父親が外遊びの環境創りという保育参画で得たもの

尾近 千鶴

フェリシア子ども短期大学

【問題と目的】本研究は、父親が子どもの環境創りを通して得たものは何かを、企画・運営を意味する保育参画の視点から論証する。母親の保育参加は多いが、父親の例は少ない。現代は都市化により外遊びが減少し、保護者は知識偏重で、心身の鍛錬を軽視する傾向という。1) 先行研究では、自然体験活動の多い施設では、保護者の子どもへの体験の促しが内面的特性や行動に影響を与えている。2) そこで、父親の保育参画で外遊びの環境を有するA保育園に着目した。

【方法】1. 対象施設 首都圏近郊のA保育園 施設での倫理に関し承認を得た。個人が特定されないよう配慮に努めた。利益相反はない。2. インタビュー調査 X年Y月 園長、副園長、父親への半構造化面接を約30分実施した。内容は、きっかけ、事例、活動成果、保育参画で得たものである。逐語録の作成及びフィールドノートに記載した。3. 分析方法 結果の意味をコーディングし概念カテゴリーを生成し、カテゴリー間の関係を検証し保育参画で得たものを抽出する。

【結果】1. 保育参画の例:1) 毎夏園庭に水遊びの池が創られた。園児は毎日水遊びを堪能する。2) 卒園制作で木製のジャングルジムを手掛けた。園児は成長に応じて遊ぶ。2. カテゴリー「園と母親に誘われた」「最初、大変」「他の子どもの様子がわかる」「卒園児を持つ親から教わる」「仕事以外で友だち」「時が経てば楽しい」「園へ感謝」などが生成された。

【結論】父親は園と母親からの誘いがきっかけで、休日を利用し外遊びの環境創りを担った。子どもと関わるが増え、作業を通して仲間ができ、他の子どもの様子を知り、時間の捻出に苦労はあるが活動を楽しめるようになった。父性「社会」「自己の存在」を再認識し子どもの成長に活かすことを得た。今後は、育児に対する意識や母親への影響を検討する。

【引用文献】1) 文部科学省(2019) 中央審議会第24回子どもの体力向上のための総合的な方策について <http://www.mext.go.jp/bmenu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/attach/1344534.htm> (情報取得 2019/8/29) 2) 山本裕・平野吉直・内田幸一(2005) 幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 5. 69-80 研究にご協力下さった皆様に感謝申し上げます。

02-002

幼稚園教諭の保健活動および保健に関する専門的知識の実態とニーズ—千葉県中央・西地域における質問紙調査より—

三池 純代^{1,2)}、戸ヶ里 泰典²⁾秀明大学 看護学部¹⁾放送大学大学院 文化科学研究科 生活健康科学プログラム²⁾

【目的】

幼稚園教諭の保健活動(予防・治療・ケア、ヘルスプロモーション)および保健に関する専門的知識の実態とニーズを明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査対象者は千葉県内の認定こども園10園を含む59の幼稚園に所属する幼稚園教諭294名とし、2019年7月から8月の期間に無記名自記式質問紙による郵送調査を実施した。回収され不備があった回答を除いた241名を分析対象者とした(有効回答率82.1%)。横断的研究デザインとし、調査項目は各種ガイドラインならびに幼稚園教諭5名のヒアリングに基づいて、1) 幼稚園における健康の保持・増進に関する保健活動27項目、2) 感染症の予防対策9項目、3) 慢性疾患児への対処方法9項目、4) 専門的知識17項目と希望する研修内容11項目、および5) 対象者の基本属性5項目を設定した。本研究は前所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

対象者のうち保育経験が10年未満の人が57.7%、私立幼稚園に勤務している人が64.7%、幼稚園教諭養成校の短大を卒業した人が57.3%、看護師等の専門職と一緒に働いた経験がある人は29.5%であった。1) に関しては、「子どもの健康状態の把握」「保育環境の整備」「生活習慣」等の項目で、86.3%~96.7%の人が実施していた。2)、3) に関連する項目では、「感染症のガイドラインの内容把握」と「予防接種歴の確認」が各々27.3%、30.3%であった。4)、5) に関しては、看護師等の専門職と働いた経験のある人は、働いた経験のない人よりも、「けいれん発作が起きた時は顔を横に向け安静にさせる」「座薬を使用する場合は、かかりつけ医の具体的な指示書に基づき慎重に取り扱う」「エビペンは心臓の働きを強めたり血圧を上げる作用がある」等の7項目で知識が多かった(p=0.001~0.019)。希望している研修内容は、「けがの手当てや緊急性の判断」(68.9%)、「アレルギーなどの病気」(61.4%)であった。

【考察】

日々の健康の保持増進への働きかけは大多数の幼稚園教諭によって行われていた。一方で、アレルギー等の医学的知識に基づく予防活動を実践していたのが一部の教諭に限られていたことから、専門的知識を習得する機会が幼稚園教諭には少なかったことが推察された。幼稚園教諭のニーズに応えるため、保健・健康に関する知識習得にかかわるメカニズムをより明らかにするとともに、保健の知識が深まるような実践的な研修内容を専門職とともに構築する必要性が示唆された。